

## あなたの力で

### 浜松市内中学校

#### 鈴木さん

私が住んでいる浜松市だけで、スーパーマーケットは、百件以上ある。スーパーマーケットに行けば、魚や肉など消費期限が短い食品が多く売られている。食品が売られているのは、スーパーマーケットだけではない。コンビニエンスストア、ドラッグストア、百貨店、無人販売、自動販売機、それに外食産業や弁当屋さんなどを加えれば、一体どれだけの食品が売られているのだろうか。途方もないほどの食品たちは、全てが買われ、全てが消費されているのだろうか。

私の祖父母は、牧場を営んでいる。だから幼いころから牛が生まれる瞬間を何度も目にして、見るたび涙が出るほど感動した。練習を重ね、乳搾り体験をした。その日に飲んだ牛乳は、言葉に表すことができないほどおいしかった。きっと、「命」を目の前にして、「命」をいただくことが、私の心や思いを変化させ、そして、味も変えたのだ。

私は、命を目の前にして生きてきたので普段から食べ物を残したことがない。私には、それが、当たり前だった。しかし、社会ではそれが、当たり前ではなかった。

世界中では、大量の食品がいきされている。家庭系食品だけでも、十三億トンだ。国民一人あたりに換算すると、毎日お茶わん一杯分の食料を捨てていることになる。食品ロスには、過剰除去、直接廃棄、食べ残しの三つがある。事業系で、食品ロス量約二百七十九万トン。家庭では、約二百四十四万トンにもなる。これをみると、食品廃棄の約半分は家庭からということが分かる。

私は、ある記事を見た。それは、まだ安全に食べられる食品を、提供するスマートフォンアプリだ。東京のとあるホテルで、これを、導入し、朝食ビュッフェで残った食品を出品し、五十パーセント削減することができたと、記事を見て、分かった。

ほかに、こんなも例がある。私たちの身近にあるコンビニの例だ。人に優しい、地球に優しいコンビニがある。そのコンビニでは、お買い物かごにリサイクルされたペットボトルのキャップを使用したり、CO2排出量を削減するために、冷凍、冷蔵ケースには、扉を設置したりと食品ロスやプラスチックごみを減らすための工夫がたくさん行われているコンビニだ。

自分の目で確かめてみたくなり、実際に近所のコンビニへ行ってみた。そこには、手前どりという食品を手前のものからと呼びかけをしたり、賞味期限のちかい食品をもとの値段よりも少し安くしたりと食

品ロスをなくすための対策が行われていた。これは、ある年のクリスマスの日のことだ。私は、家族みんなで夜にコンビニへ行った。すると、店員さんから、「ケーキを割引きするので買ってください。」と突然言われ、まだまだケーキは残っており、その全てのケーキは、捨てられてしまっているのだと思うと、とても心が痛くなった。その数年後、クリスマスの日にコンビニへ行ってみた。予約制の販売がほとんどで、当日販売のケーキやチキンは、数が限られていた。店員さんから割引販売をすすめられることもなかった。たった数年の間で大きく変化したのだろうか。余った食品を捨てるのは、生産者にとっても、環境にとっても、よくないことだ。私は、この変化を大いに歓迎したい。

だが一方で、事業系で企業努力を重ね、食品ロスがゼロになったとしても、食品ロス自体はなくなるならない。なぜなら、家庭系が食品ロスの半分を占めているからだ。

私は、今日外食をした。初めて、ネパールのカレーを食べた。ナンがとても大きくて、食べ切れなかった。ナンが、こんなに大きいとは思わず、注文してしまった。店員さんからテイクアウトするかすすめられ、包んでもらった。

私が、この作文に取り組みなければ、日常よくある「食べきれない」

に、こんなに深く考えをめぐらせることはなかっただろう。

その後、私はすぐ母に連絡し、夕飯がいらないと伝えた。包んでもらったナンを夕飯でおいしくいただいた。外食での食品ロスと家庭での食品ロスを防いだのだ。

こういう小さなことで、中学生の私でも食品ロスを減らすことができる。今日学んだことは、特に、海外の料理を注文する時は、異文化を勉強すること。料理の量や内容が分かれば、注文する時に、オーダーを調整できる。

これからも、一回一回の食事を大切に、今日みたいに学ぶことがあれば、それを活かして、食品ロスを減らしていきたい。

この作文に取り組んだおかげで、事業系の食品ロスに対しての企業努力も学べた。その企業努力をむだにしない消費者になりたい。